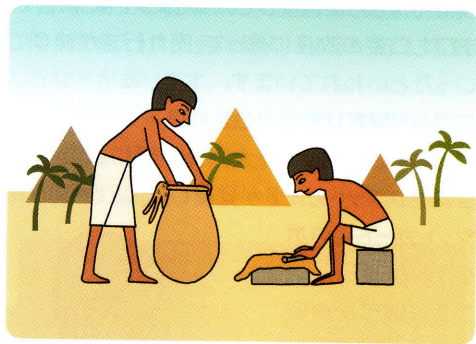


「皮」を「革」にしてくれるなめし

皮を有効利用できるようにするために

動物の皮は、そのままにしておくと腐ったりして使えなくなります。それを防ぐために考え出されたのが「なめし」です。なめしは、古代のエジプトなどで、すでに行われていました。



現在の主ななめしには、植物性の「タンニンなめし」、鉱物性の「クロームなめし」、両者の特長を生かした「混合なめし」があります。

自然な風合いの革に仕上がるタンニンなめし

タンニンなめしは、ミモザやチェスナット(栗)などの樹木の樹液に含まれているタンニン(渋)を使ってなめすというもの。このなめしで作られる代表的な革には、ぬめ革やコードバンなどがあります。自然な風合いの革に仕上がりますが、水や熱に弱いという弱点もあります。

型崩れしにくい革に仕上がるクロームなめし

クロームなめしは、塩基性硫酸クローム塩という化合物によってなめすもの。クロームなめしでできた革は、ソフトで復元力のある柔軟性を持つため、型崩れしにくいという特長がありますが、自然な風合いという点では、タンニンなめしの革が勝ります。

「タンニン+クローム」の混合なめし

タンニンなめしとクロームなめしの特長を生かした方法。タンニンとクロームを混合して行うもので、革の用途によって、タンニンとクロームのどちらかを多めにします。現在、市場に出回っている革のほとんどは、この混合なめしによってつくられています。

「染料」と「顔料」で異なる風合いに

革の変色を防ぐために発達した染色

革を染めるのは、そもそもは変色などを防ぐことが目的でした。なめしなどと同様、革を利用してきた長い歴史の中で、さまざまな染色方法や染料が工夫され、発達したのです。現在の染色方法には大きく分けて「染料染め」と「顔料染め」があります。

自然な仕上がりが持ち味の「染料染め」

染料染めは、タイコとも呼ぶ大きな丸いドラムに、革、水、水に溶ける染料などを入れて、長時間回転させて染めていきます。

染料染めでは、小さなキズやシワなどがそのまま残り、革本来の味わいを楽しめる、自然な仕上がりになります。その一方で、革は耐熱性が低く、繊維製品のように高温で染色できないので、色落ちが生じやすいという特性もあります。自然な風合いがある革、いわば革らしい革ほど色落ちがしやすいともいえるので、濃い色の皮革製

品を使用する際には、薄い色の衣服を避けるといった注意が必要です。

キズや汚れに強い「顔料染め」

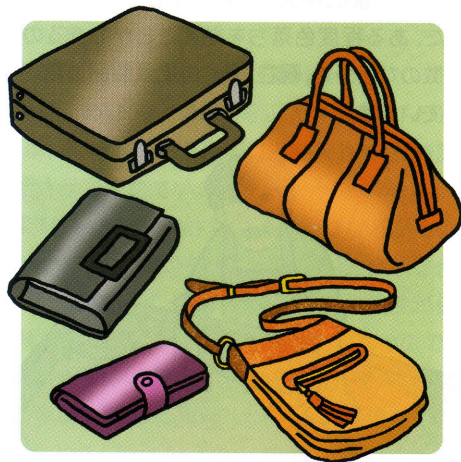
一方、顔料染めは、水に溶けない顔料を、革の表面にスプレーやブラシで塗っていく方法です。顔料で革の表面をコーティングするような仕上がりになるので、染料染めに比べて、革本来の味わいは感じ取りにくくなります。しかし、水や汚れに強く、キズをカバーすることもできます。また、ある程度色落ちを防ぐことができるのも特徴のひとつで、現在、多くの皮革製品に用いられています。



加工方法によって異なる個性の革に

多種多様な革の加工方法

なめした革にさまざまな加工を施すことで、革は異なった風合いや個性を持つことになり、それぞれに応じた使われ方をします。ここではその主なものを紹介しましょう。

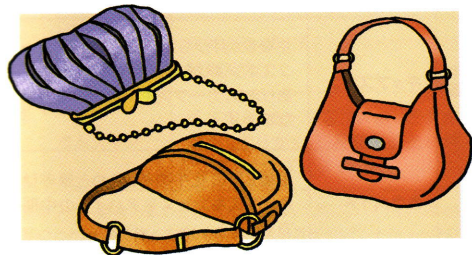


■革の仕上げ方

銀つき革	皮の表面のことを銀面といい、それを生かした革です。染料や顔料を使用して仕上げた、最も一般的な革といえます。
めめ革	成牛皮、豚皮などをタンニンなめしで仕上げた革です。
ヌバック革	ペロア革と違って牛革の銀面を起毛させた革。スエードと比べると毛足が非常に短くなっています。
スエード革	子牛革ややぎ革、羊革などの裏面をサンドペーパーで毛羽立てて、ベルベットのようになり毛させた革です。
ペロア革	主に成牛革の裏面をスエードのように起毛させた革。スエードより起毛が粗く、毛足がやや長いのが特徴です。
バックスキン (BUCK SKIN)	鹿革の銀面を起毛させた革。現在は鹿革でなくても、起毛した革の総称として使用されることが少なくありません。
揉み革	革を揉んで表面にシボ(しわ)をつけた革。水揉み、角揉み、八方揉みなどがあります。

シュリンク革	なめしの工程で薬品を使って皮の銀面を縮ませた革。揉み革よりもシボ(しわ)が強調されています。
型押し革	プレス機で圧力をかけて加熱し、革の表面に凹凸による模様をつけた革です。
エナメル革	主にクロームなめしをした革の表面に、合成樹脂の仕上げ剤を塗布し、光沢を出した革です。
ガラス貼り革	なめし工程で、ガラスやホーローの板に貼りつけて乾燥させてから、銀面をサンドペーパーでこすり、合成樹脂の仕上げ剤を塗布した革。丈夫なので、鞆などに幅広く利用されています。
グレージング仕上げ革	めのう、ガラス、金属のローラーで強い圧力を加えて、主に銀面に光沢を出した革です。
オイル仕上げ革	動物性油、ウールグリース、合成油などを使用して表面を仕上げて、ぬめり感を出した革です。
床革 (とこがわ)	銀面を取り除いた床皮を原料にした革。銀面がないため、強度はあまりありません。

セーム革	鹿皮を油でなめした革。柔らかな手触りが特徴です。洗濯が可能です。
印伝革	鹿皮をなめして白革にし、染色後、漆で模様をつけた革です。
あめ豚革	ピッグスキンをタンニンなめしし、染色後、銀面を摩擦したあめ色(淡黄茶色)の革です。
毛皮	毛をつけた状態でなめして仕上げた革です。
はらこ	生後間もない毛並みのいい子牛の革です。



さまざまな持ち味を製品に生かして

牛革からエキゾチックレザーまで

鞆・ハンドバッグ・小物には、牛革を中心に、豚や馬、羊などの哺乳類から、は虫類や両生類などのエキゾチックレザーまで、多種多様な革が用いられています。それぞれ持ち味が違い、それが製品に趣を与えています。主な皮革の特徴をまとめてみました。

■革の種類

牛革	カーフスキン	生後6カ月ぐらいの子牛の革。きめが細かく柔らかで、高級革製品の材料として使われます。
	キップスキン	生後6カ月から2年ぐらいの革。カーフスキンよりきめがやや粗く、厚みもあります。カーフスキンに次いで上質な革です。
	カウハイド	生後2年の牝牛の革。きめと厚みはキップスキンとステアハイドの間です。

牛革	ステアハイド	生後3～6カ月の間に去勢した、生後2年以上の牡牛の革。きめは粗く、厚みもあります。最も多く使用されている革です。
	ブルハイド	生後3年以上の牡牛の革。きめは粗く、丈夫で厚いのが特徴です。
	地生(じなま)	国内産の牛の革です。
馬革	ホースハイド	牛革に比べ、柔らかいのが特徴です。
	コードバン	臀部の革。繊維が緻密で、美しい光沢があります。
豚革	ビッグスキン	摩擦に強く、丈夫。他の革と異なり、国内で自給できます。
羊革	シープスキン	成羊の革。薄く滑らかで柔らかいのが特徴です。
	ラムスキン	子羊の革。シープスキンよりきめが細かく柔らかく、高級革製品の材料として使われています。

※スキンは小動物の革のことで、小判で薄くて軽い。ハイドは大動物の革のこと。大判で厚くて重い。牛革では重量が30ポンド(13.6キログラム)以下のものがスキン、以上のものがハイドとなる。

やぎ革	ゴートスキン	成やぎの革。羊革より丈夫で、型崩れしにくいのが持ち味です。
	キッドスキン	子やぎの革。ゴートスキンよりきめが細かく、柔らかいのが特徴です。
鹿革	ディアスキン	柔らかで手触りのよい革です。キズがよくあり、銀面を加工して使用することが多いようです。
カンガルー革	カンガルースキン	丈夫で強く、薄くてしなやか。高級素材として使用されています。
象革	象革	ヨーロッパの王侯貴族に愛されたといわれる高級な革です。独特のシワ、模様があり、厚くて丈夫です。
らくだ革	らくだ革	希少性の高い革で、しなやかで丈夫です。厚みがあり耐久性に優れています。
ダチョウ革	オーストリッチ	羽根を抜いた後のクイールと呼ばれる突起模様がユニークです。強靱で重厚さもある革で、貴重視されています。主に南アフリカで養殖されています。

＝エキゾチックレザー

は虫類革	ワニ革	クロコダイル革	クロコダイルと呼ばれる種類には、イリエワニ、ニューギニアワニ、ナイルワニ、シャムワニがあります。高級品として人気があります。
		アリゲーター革	アメリカ合衆国に生息するワニがアリゲーターです。クロコダイル革と同様に高級品のワニ革として扱われます。
		カイマン革	中南米に生息するワニです。腹部にカルシウム分が多いために硬く、クロコダイル革やアリゲーター革とは区別して扱われます。
	トカゲ革		リングトカゲ、アフリカトカゲ、テジュなどの種類があります。は虫類革の中でもポピュラーな素材として人気がある革です。独自の鱗模様は多くの製品に幅広く生かされています。
	ヘビ革		個性的な斑紋模様を持つヘビ革は、皮革ファッションに欠かせない素材のひとつです。主流はニシキヘビで、連続したダイヤ型の斑紋模様が特徴です。
魚類革	サメ革		頑丈で耐水性のある革。強度があり、使うほどにツヤが出ます。
	エイ革		硬くて光沢感があるのが特徴。傷つきにくく水にも強い革です。エイ革をステイंगレーやガルージャともいいます。